

特別企画展

芭蕉をめざした男

— 酒井弥蔵の旅日記 —

● 期間

平成20年 **10月28日** 火 ~ 平成21年 **1月25日** 日

● 開館時間

午前9時30分～午後5時

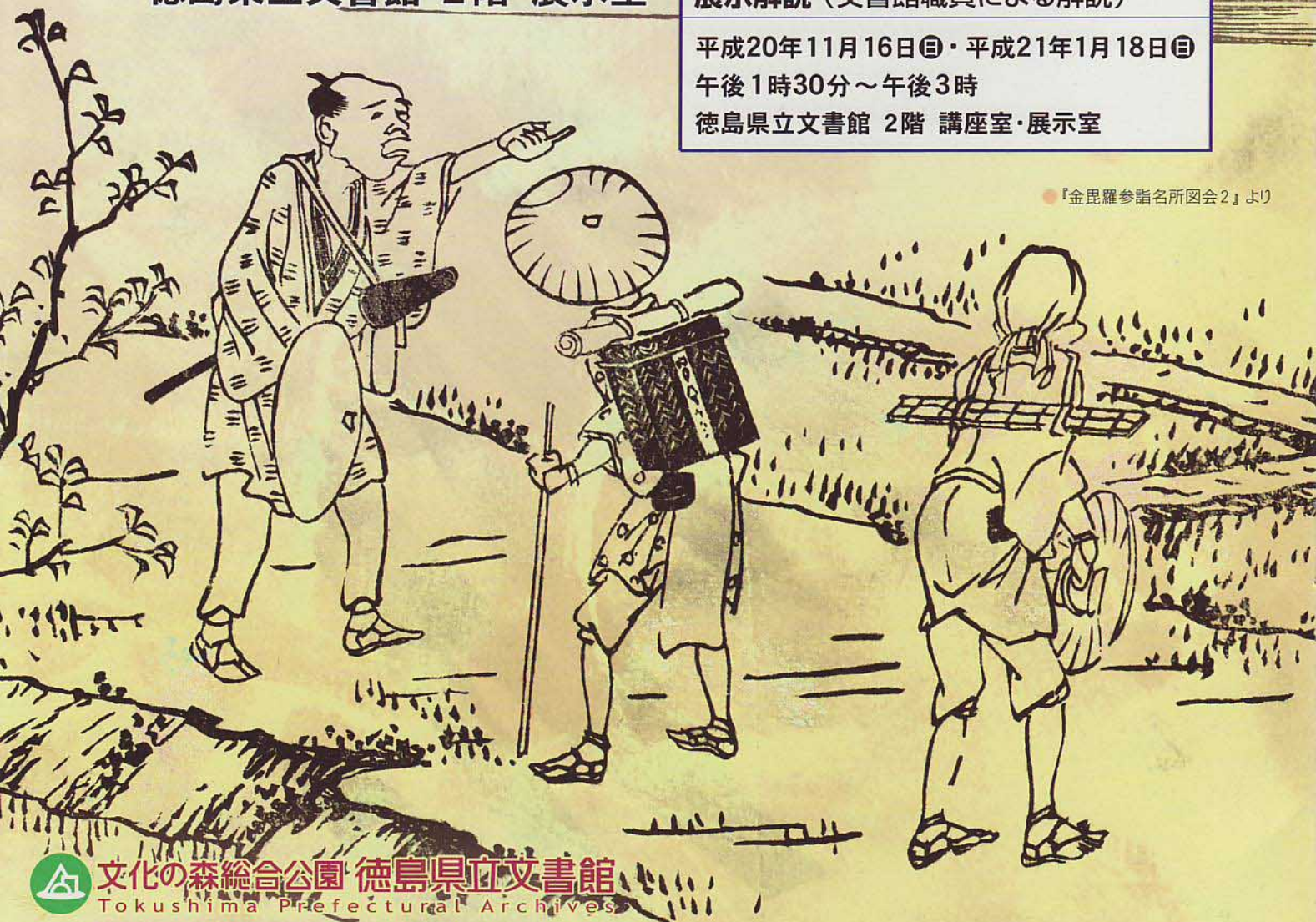
● 場所

徳島県立文書館 2階 展示室

展示解説（文書館職員による解説）

平成20年11月16日 日・平成21年1月18日 日
午後1時30分～午後3時
徳島県立文書館 2階 講座室・展示室

● 『金毘羅参詣名所図会2』より



文化の森総合公園 徳島県立文書館
Tokushima Prefectural Archives

<http://www.archiv.tokushima-ec.ed.jp>

「おどる国文祭」1周年記念第11回徳島県民文化祭共催事業

酒井弥藏(文化五年(一八〇八)〜明治二十五年(一八九二))は、吉野川中流の物流の拠点である商人町半田に生まれ育った。旅は、商人である弥藏にとつては、それこそが生業であるが、大きな楽しみでもあった。

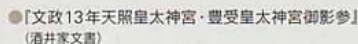
道路網が整備され、流通が盛んになったこの時代、多くの庶民が旅に出て、旅を楽しんだ。例えば、弥蔵も行った文政十三年（一八三〇）の御影参り（伊勢参り）には四百万人以上の人が参加したと言われている。日本の人口が三千万人とされている時代、一割を遙かに超える日本人が伊勢までの旅をしているのである。

また、弥藏の著した出雲への旅日記を見ると弥藏の居宅のある半田村から五十人、美馬郡から千七百人もの人が、出雲の神代神楽を見に旅だったことが書かれている。この旅で弥藏は二十一人を連れて旅に出ている。こうした伊勢や出雲への参拝はまさに現代の団体旅行のようなものであった。

こうした庶民の旅の時代、弥蔵が外

の人々と違ふのは、その旅の様子を詳細に書き残したことである。まず旅先でメモを取り、持ち帰つて編集して旅日記を作り残している。こうした旅日記は標題が付けられ、俳諧を交えた紀行文となつてゐる。これは、弥蔵が心の師としていた松尾芭蕉を強く意識して作られたものだと思われる。しかし、細かな旅の費用が几帳面に記されているところに、商人としての弥蔵の本当の顔が見える。

弥蔵が別に残した記録によれば、旅行に出たのはこの展示で取り上げた旅行記に残されている時だけではない。合計一七〇回以上旅に出ており、讃岐の金比羅宮・善通寺には毎年のように参拝していたことや、紀伊の高野山や大和の東大寺など近畿地方には三度、安芸の宮島など中国地方にも三度、その他伊予の札所巡りの旅など、一ヶ月近くになる大旅行を何度も経験したことがわかる。それにしてはほとんど全てが歩き旅であったこの時代、弥蔵の健脚ぶりには驚くばかりである。



天満天神・四天王寺・生玉社・高津
社・稲荷社・南御堂・北御堂・座摩大
神宮・御雲大明神・阿弥陀池

本能寺・一条草堂(行願寺)・仙洞御所・内裏御殿・百万遍・吉田社・稲荷大明神・真如堂・金戒光明寺・知恩院・祇園社・八坂塔・清水寺・西大谷・方広寺・三十三間堂・東本願寺・西本願寺・伏見稲荷・東寺

元興寺・南円堂・興福寺・大仏殿・二月堂・八幡宮・春日大明神・若宮社

● = 立寄
▲ = 宿泊

いあいさつ

半田村(つるぎ町半田)の商家、酒井家には六五〇〇点に及ぶ膨大な商業資料や庶民資料が残されています。当館では今までの企画展で、酒井家文書の概要をはじめ中心人物である酒井弥藏の人となりや文化人としての側面を紹介してまいりました。

今回は酒井弥藏の俳諧と旅に焦点を当て、特別企画展「芭蕉をめざした男 ― 酒井弥藏の旅日記 ―」といたしました。弥藏は写本をしながら自ら読み書きや心学を学び、高い教養を身につけていました。また、祖父農人(孫助)、父梅月(武助)、伯父花山(新兵衛)らの影響もあって早くから俳諧に親しみ、芭蕉を師と崇めておりました。

弥藏はその几帳面な性格もあって日常生活から文化活動にいたるまで膨大な記録を残しております。なかでも毎年のように旅に出かけ多くの旅日記を残しています。芭蕉にあこがれた弥藏の俳諧を折り込んだこれらの紀行文を取り上げ、弥藏の俳諧や当時の名所案内

絵図、さらに現在の写真などを紹介しながらその旅の足跡をたどります。

弥藏の筆は旅先での宿賃や草鞋代にいたるまで細かな記録を残しており、庶民が楽しんだ旅の様子を詳しく窺うことが出来ます。また、弥藏は江戸時代に流行した「おかげ参り」や「ええじゃないか」にも参加しています。当館所蔵の関連資料とともにその概要も紹介いたします。

江戸時代末から明治にかけての激動の時代を生きた地方の庶民の文化活動や旅の様子から、今を生きるわたしたちが、自分たちの文化活動のありようを考えるとともに、合わせて記録を残すことの大切さについて考える機会したいと思います。

この展示の開催にあたり、酒井一宇氏をはじめ数多くの方々のご協力をいただきました。末尾ながらお礼申し上げます。

平成二十年十月二十八日

徳島県立文書館長 計盛 眞一郎

①『見る若葉聞く郭公旅日記』(酒井家文書)

讃岐金比羅→善通寺→本山寺
3月晦日~4月4日(天保12年・1841)
善通寺ご開帳

- 四五日の 郭公夢は 覚えたり
(帰宅して)

②『見る青葉聞く郭公旅日記』(酒井家文書)

伊予三島明神→前神寺→石鎚山等
5月24日~29日(天保14年・1843)
東予及び石鎚山参詣

- 峰高し ところで開かせ 郭公 (ほととぎす)
(阿波伊予国境の峠)
- 草臥れてや 早乙女衆の 昼寝かな
(下山村立石蕎麦屋 田植え仕舞いの女性が座敷で休むのを見て)
- 海近し また山近し 時鳥 (ほととぎす)
(津根村の茶店にて)

■伊予国州之内村前神寺に芭蕉塚あり
花咲きて 七日鶴見る 禁かな

③『弘化二年乙巳春中旅日記』(酒井家文書)

讃岐金比羅→善通寺→本山寺等
正月29日~2月2日(弘化2年・1845)
金比羅、善通寺、5ヶ処巡り参詣

- 象獅子の 中や春日に 光る寺
(善通寺にて)
- 春残し 世は捨てれども 身は捨てず
(拝師山捨身の獄に僧籠もるを聞きて)
- 見返れば はや堂塔も 夕霞
(申の刻勝間村より弥谷寺を振り返り見て)

④『散る花の雪の旅日記』(酒井家文書)

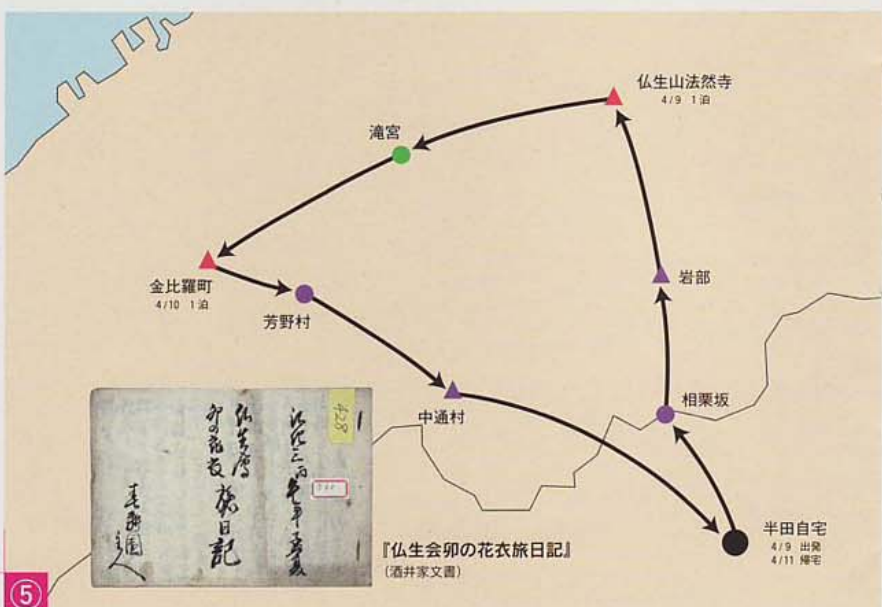
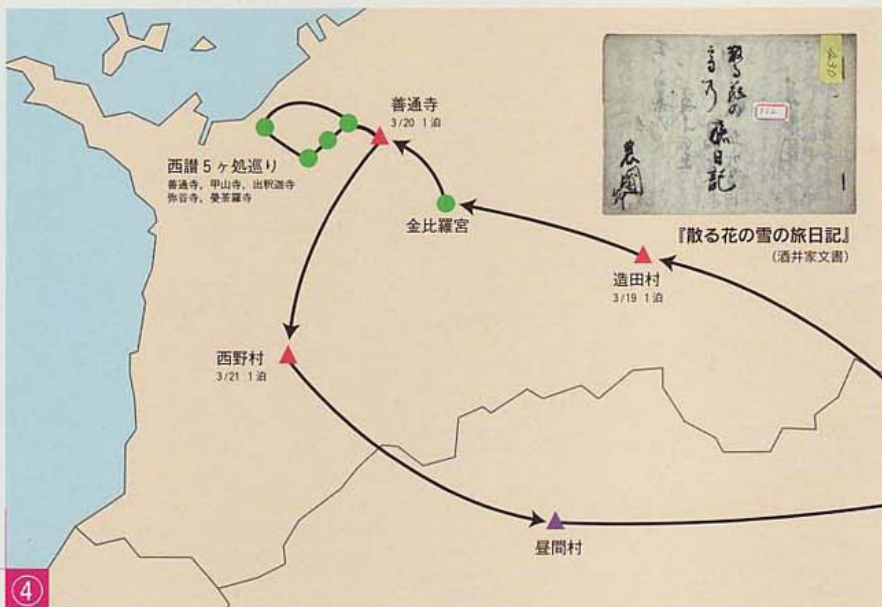
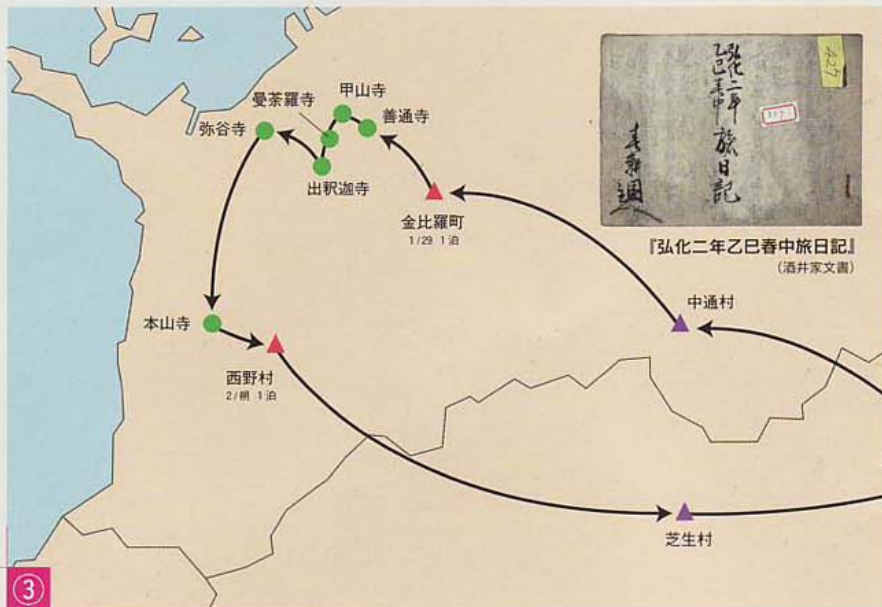
讃岐善通寺→5ヶ処巡り
3月19日~22日(弘化3年・1846)
善通寺百味講出席

- 散る華の 雪に笠着て 旅出かな
(旅立ちに際して)
- ぶらぶらと 登る山路や 藤の花
(重清村にて)
- 山高く 登れと上に 鳴く雲雀
(阿讃国境にて)

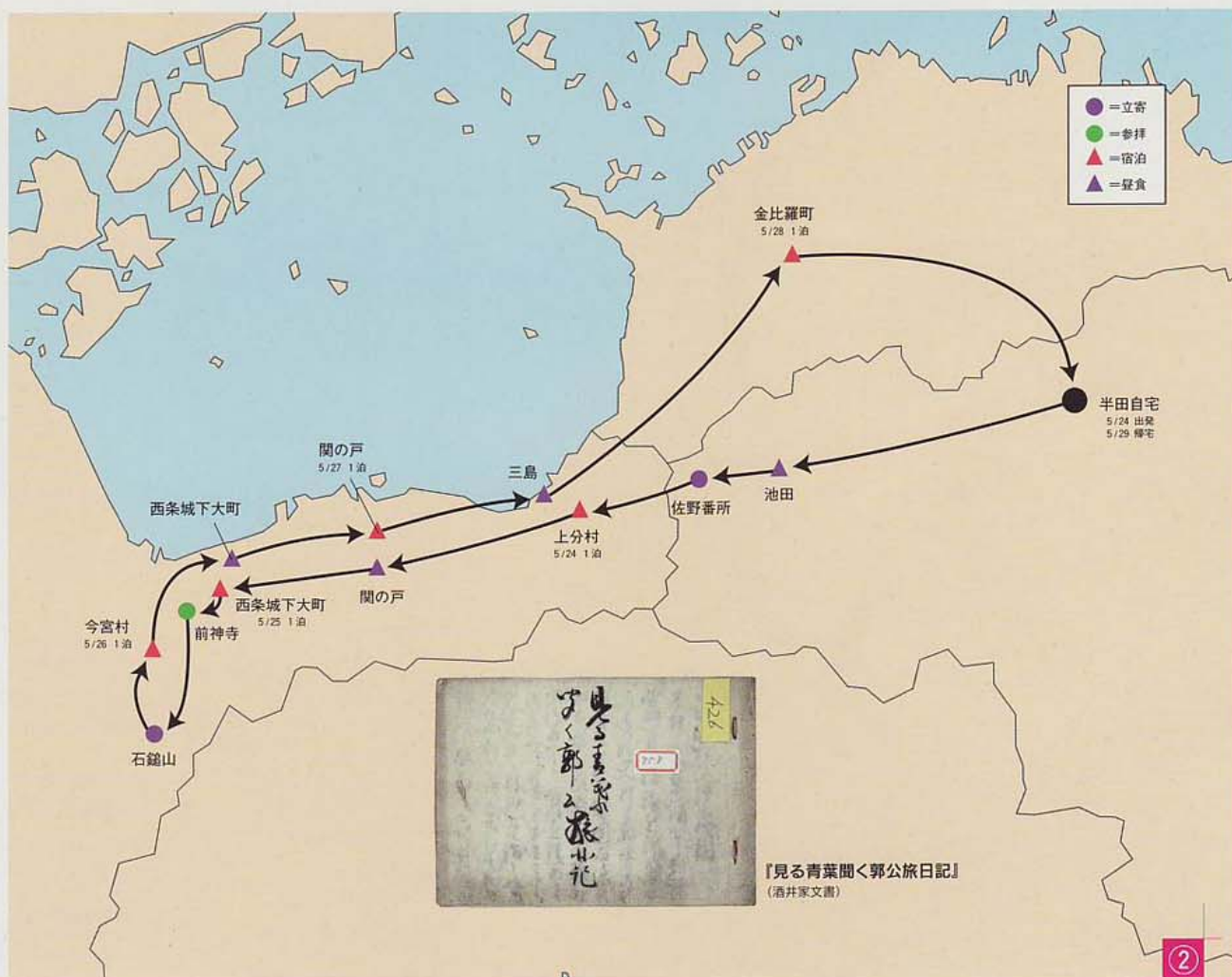
⑤『仏生会卯の花衣旅日記』(酒井家文書)

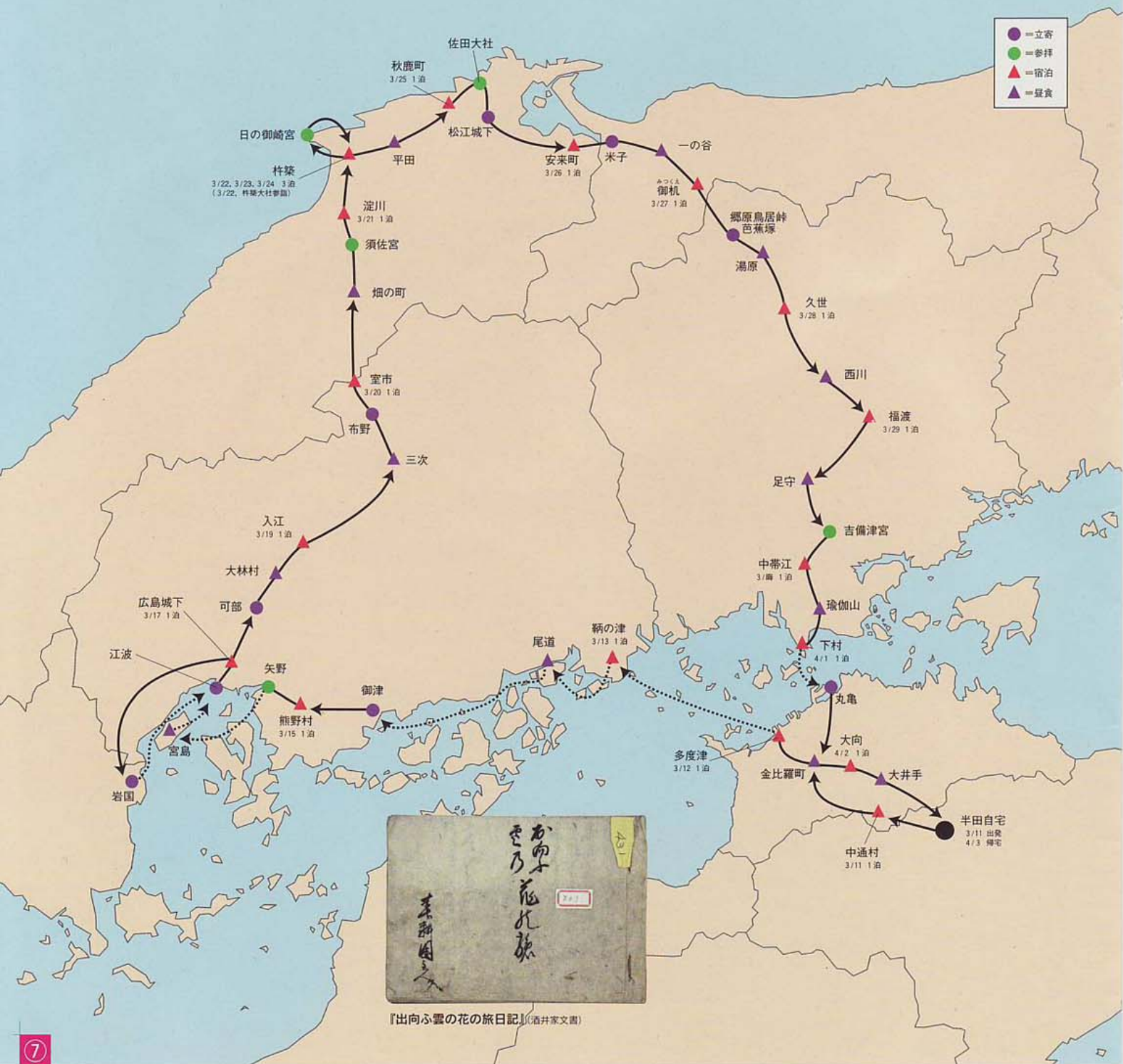
讃岐金比羅→滝宮天満宮→法然寺等
4月9日~11日(弘化3年・1846)
讃岐仏生山法然寺ご開帳

- 鍋被た 様な姿や つつま山
(栗熊村つつま山を見て)
- 四月や 毛色替たる 象図山
(岡田村の池に堤より象頭山を見て)
- 見て嬉し 雨の晴れ間や 若葉ふじ
(金比羅大権現12景を見て)



旅日記





⑥『踊見旅日記』(酒井家文書)

讃岐滝宮村祇園社等
7月24日～26日(弘化3年・1846)
讃岐滝宮念仏踊り見物

- 朝霧を 押し分け押し分け 旅出かな
(氏神社に参詣して)
- 瀬の音に 霧に霞や 今朝の秋
(小野浜から吉野川の渡しを渡って)
- 丁石を 数えて秋の 日や登る
(重清村三頭山を登って)

⑦『出向ふ雲の花の旅日記』(酒井家文書)

出雲杵築大社等
3月11日～4月3日(嘉永2年・1849)
出雲杵築大社の神代神楽

- 留守中を 頼むぞ散るな 庭の花
(出立に際して庭の桜に向かいて)
- 道連れは みな若草よ 花の旅
(同行者に向かいて)
- 旅行や 笑うて送る 象頭山
(金比羅宮にて)

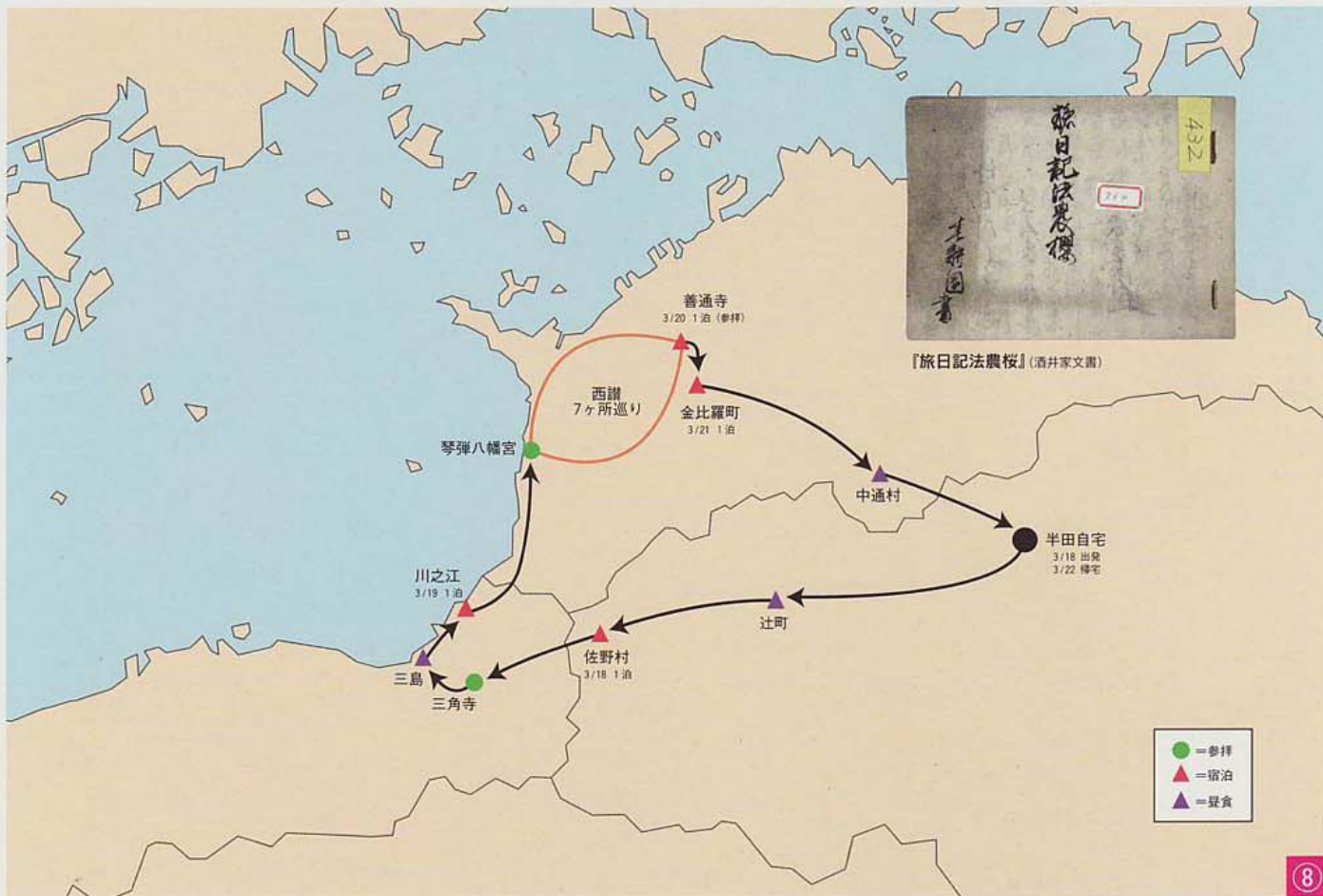
■芭蕉塚 頼の浦円福寺にあり
疑うな うしほの花も 浦の春

⑧『旅日記法農桜』(酒井家文書)

伊予三島明神→讃岐普通寺等
3月18日～22日(嘉永3年・1850)
普通寺百味講出席

- 心にも 法りの華咲く さくらかな
(表紙裏にて)
- 霞む日や 浮き画の様な 沖の島
(川之江の付近で伊吹島を見て)
- かき登る 心や花の 筆の山
(出釈迦寺にて)







⑨『極楽花の旅日記』(酒井家文書)

讃岐善通寺→外東讃の諸寺
3月20日～25日(嘉永4年・1851)
善通寺百味講出席

- 我が庭の 花を見捨てて 旅出かな
(出発に際して)
- 春雨や しよげとなりたる 象頭山
(雨降り止まず金比羅大権現を参詣して)
- 画に書いて 見たし霞の 船と鳥
(宇多津町道場寺(郷照寺)にて)

⑩『梅の花見の旅日記』(酒井家文書)

讃岐滝宮天満宮等
2月24日～27日(嘉永5年・1852)
讃岐滝宮天満宮大曼荼羅供の見物

- 夕陽や 花の戻りの 人通り
(滝宮市戻りの人通りを見て)
- 松の琴 経読み鳥や 春の風
(滝宮大曼荼羅供を見て)
- 白峰や まだそこ愛に 残る雪
(白峰寺にて)

⑪『さくら卯の花旅日記』(酒井家文書)

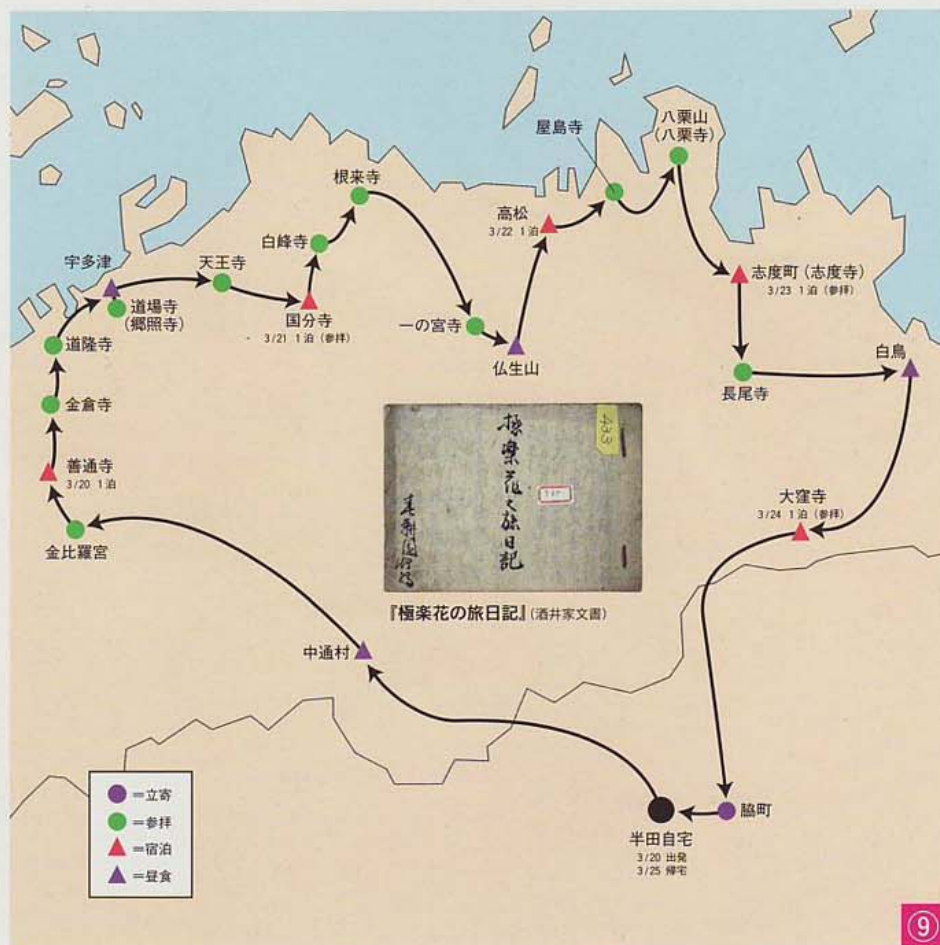
四国霊場の内阿波国内及び、
阿淡両国霊場巡り
3月24日～4月15日(安政5年・1858)

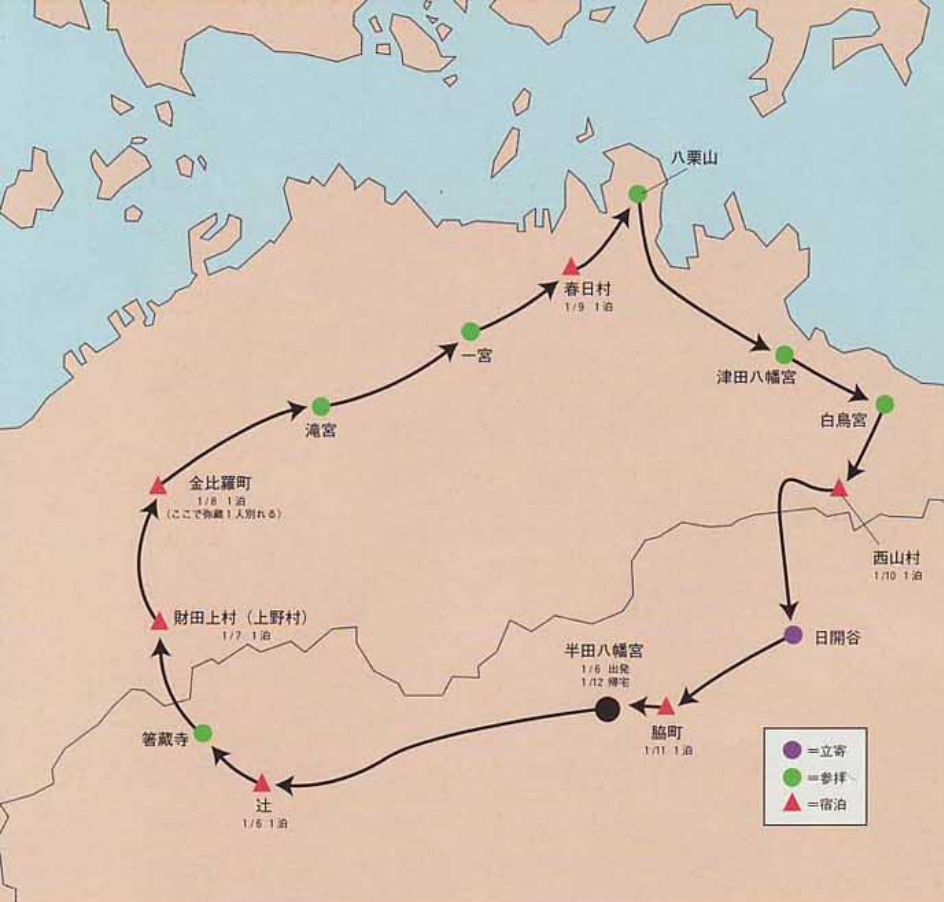
⑫『慶応二丙子年十一月南方旅日記』
(酒井家文書)

日和佐・由岐・富岡等
11月12日～28日(慶応2年・1866)
目葉入れ替え(敷地屋兵助)



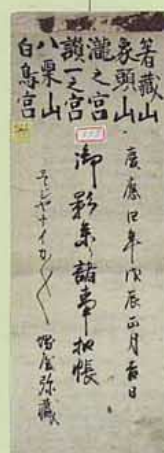
⑬『豫州旅日記』(酒井家文書)
伊予国今治・西条・小松等
12月4日～19日(明治元年・1868)
目薬入れ替え(敷地屋兵助)





●『神保降臨記』(西野家文書)

酒井弥蔵 ——「御影参り諸事控帳」から—— ええじゃないかの旅



●『慶応4年御影参り諸事控帳』
(酒井家文書)

慶応三年(一八六七)の七月から八月にかけて三河国(愛知県東部)ではじまったとされる「ええじゃないか」の大乱舞は十一月末に撫養に上陸し、十二月から翌年の正月にかけて、阿波国一円を興奮の渦に巻き込んでいった。酒井弥蔵の「御影参り諸事控帳」によれば、各地に御札降りなどの奇瑞が起こり、烏帽子・白装束を身にまとい、手に幣と杓を持った群衆が、「日本国は神国で、神風さつと吹き渡り(中略)交易場所には石が降り、異国の者は皆殺し、天下泰平納りてエエジャナイカ」などと歌い踊りながら神社仏閣に殺到したという。

弥蔵自身も「諸神諸菩薩天降り、おかげ家内息災で、黄金花咲春迎へ(中略)蓬萊山とは是ナラン、エエジャナイカ」などといった囃し詞を作詞しているが、ついにいてもたってもいらなくなったのか、みずからも「一座」を結成して「ええじゃないか」に参加している。

七日には箸蔵寺を、八日には金比羅宮を参拝した後に、一行と別れた弥蔵は、九日から八栗山・志度寺・白鳥神社など讃岐の有名な神社仏閣を巡って、十二日に帰宅している。この間にかかった経費は、十四名で八幡宮に奉納した絵馬代を含めて五十九匁二分と記録しているところがいかにも弥蔵らしい。



芭蕉と弥蔵

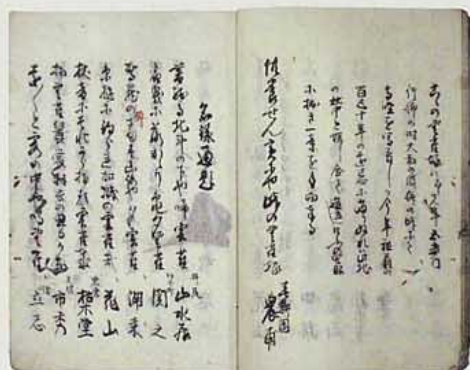


南に半田の街、北に酒井弥蔵も住んでいた吉野川の川湊小野浜を望む小野峠に、ひとつの塚が立っている。塚には「雲雀より うえに休らふ 峠かな」、俳聖とされる松尾芭蕉の句が彫られている。裏には天保十四卯年（一八四三）の文字。半田村の芭蕉を慕う人々が建てた芭蕉塚である。この句を載せている本は芭蕉の『笈の小文』である。笈の小文は貞享四年（一六八七）から五年にかけて芭蕉の生地である伊賀上野を中心に尾張・伊勢・大和・紀伊・大坂などをめぐった紀行文集で、弟子乙州が芭蕉の死後宝永六年（一七〇九）に刊行している。この原本は、酒井家にも残されており、弥蔵自身が、芭蕉塚のできる一年四ヶ月前、天保十二年（一八四一）十一月十九日に購入したと記している。

この塚の建立については、同じく酒井家文書の『雲雀集』に詳しい。この雲雀集は、この塚が建てられるに際して作られた句集で、その経緯についても記されている。石碑は、天保十四年三月に建立することが決まり、句から雲雀塚と名づけられた。三宅熊三郎が文字を書き、備前の石工児島久六が碑銘を彫り、三月下旬には完成した。四月十二日には半田村内外からたくさんの方が集まって、記念式を行い句会を行っている。その中には当然小野簗社中の一員として酒井弥蔵の姿もあった。

雲雀集の中には「この雲雀塚は、先年五畿内行脚の時、大和の国膳の峠（現奈良県桜井市細峠）にて高吟を写し有之が、今年祖翁（芭蕉）の一五〇年の遠忌に当りぬれば、この地の社中と喋し合いて造立し、今日の開眼に拙き一章を手向け奉る 供養せん 実にや峠の 雲雀塚 春耕園農甫」と書かれている。春耕園農甫は、酒井弥蔵の俳号である。弥蔵の記録によれば、天保十一年（一八四〇）二月、十二年二月、八月と三度も高野山・吉野を含め近畿一円を旅しており、この時細峠で芭蕉の句碑を実際に見たものと思われる。弥蔵はこの雲雀塚建立の発願人の一人に挙げられており、まさに中心的な役割を果たしていたのである。

雲雀集の中には「この雲雀塚は、先年五畿内行脚の時、大和の国膳の峠（現奈良県桜井市細峠）にて高吟を写し有之が、今年祖翁（芭蕉）の一五〇年の遠忌に当りぬれば、この地の社中と喋し合いて造立し、今日の開眼に拙き一章を手向け奉る 供養せん 実にや峠の 雲雀塚 春耕園農甫」と書かれている。春耕園農甫は、酒井弥蔵の俳号である。弥蔵の記録によれば、天保十一年（一八四〇）二月、十二年二月、八月と三度も高野山・吉野を含め近畿一円を旅しており、この時細峠で芭蕉の句碑を実際に見たものと思われる。弥蔵はこの雲雀塚建立の発願人の一人に挙げられており、まさに中心的な役割を果たしていたのである。



●『雲雀集』の中の農甫（酒井弥蔵）の記述



●『雲雀集』（酒井家文書）



●『笈の小文』（酒井家文書）

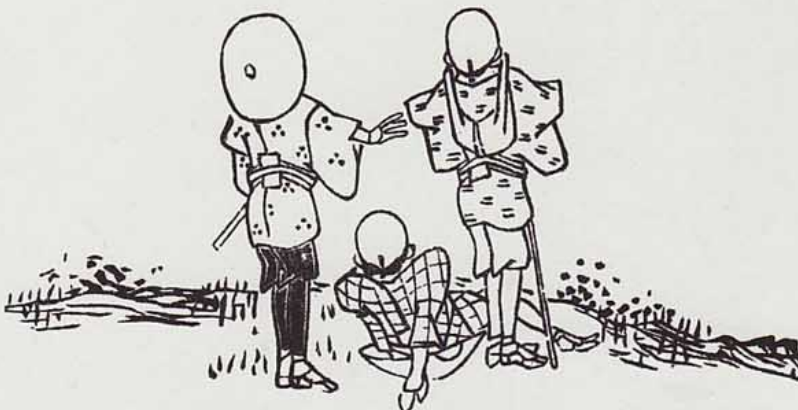


●半田小野峠の雲雀塚 「雲雀より うえに休らふ 峠かな」

展示資料一覧

No.	表 題	年 代	備 考
弥蔵の旅の始まり(文政13年の御影参り)			
1	伊勢両皇太神宮御影参施行宿附覚	文政13年(1830)	サカイ00110
2	天照皇太神宮・豊受皇太神宮御影参	文政13年(1830)	サカイ00039
3	高野山絵図	文化7年(1810)	サカイ01565
4	おかげ参り心得	文政13年(1830)	サカイ00460
5	ならめいしよゑづ(奈良名所絵図)	(幕末期)	サカイ01562
6	(西国巡礼絵図)	天保2年(1831)	サカイ01432
弥蔵の旅日記			
7	見る若葉聞く郭公旅日記	天保12年(1841)	サカイ00081
8	見る青葉聞く郭公旅日記	天保14年(1843)	サカイ00082
9	春中旅日記	弘化2年(1845)	サカイ00083
10	散る花の雪の旅日記	弘化3年(1846)	サカイ00085
11	仏生会卯の花衣旅日記	弘化3年(1846)	サカイ00084
12	踊見旅日記	弘化3年(1846)	サカイ00141
13	旅日記法農桜	嘉永3年(1850)	サカイ00087
14	極楽花の旅日記	嘉永4年(1851)	サカイ00088
15	梅の花見の旅日記	嘉永5年(1852)	サカイ00080
16	さくら卯の花旅日記	安政5年(1858)	サカイ00254
17	南方旅日記	慶応2年(1866)	サカイ00283
18	予州旅日記	明治元年(1868)	サカイ00282
19	讃州象頭山十二景之図	(幕末期)	サカイ01556
出雲への旅			
20	出向ふ雲の花の旅日記	嘉永2年(1849)	サカイ00086
21	広島町々道しるべ略図	(幕末期)	サカイ00293
22	芸藩伊都岐島神社(厳島神社の図)	(幕末期)	サカイ01561
23	防州岩国錦帯橋図	(幕末期)	サカイ01543
24	出雲大社太々神楽記	明治2年(1869)	サカイ00054
25	出雲国大社記事	宝永2年(1705)	サカイ00056
芭蕉と弥蔵			
26	笈の小文	宝永6年(1709)	サカイ00313
27	雲雀集	天保14年(1843)	サカイ00381
28	阿波模墨直会式集	天保6年(1835)	サカイ00164
29	芭蕉忌	天保9年(1838)	サカイ00351
30	蕉風俳士見立鏡	嘉永5年(1852)	サカイ00408
慶応4年のええじゃないか			
31	神仏降臨記 天	慶応4年(1868)	ニシノ07072
32	神仏降臨記 地	慶応4年(1868)	ニシノ06376
33	御影参り諸事控帳(ええじゃないか記録)	慶応4年(1868)	サカイ00459

※資料保存のため、期間中展示品が替わることがあります。



芭蕉をめざした男

— 酒井弥蔵の旅日記 —

平成二十年十月二十八日発行

編集・発行 徳島県立文書館

〒770-1807 徳島市八万町向寺山
電話 〇八八-六六八-三七〇〇

印刷 原田印刷出版株式会社

〒770-0903 徳島市西大工町四丁目五
電話 〇八八-六三二-二三五六